

「首なし」の国ベトナム

坂田正三

最近、筆者の研究フィールドであるベトナムへ行っても、カルチャーショックを受ける機会が少なくなつた。市場経済化が進み、おかしな制度や不思議な慣行が消えつつあるベトナムに新鮮味を感じなくなっているのかもしれない。とはいえ、初めて訪れた人にとって、ベトナムはまだまだ驚かされるのが少なくない土地である。まして、自分の狭い生活圏以外のことをあまり知らない子供が行くと、さまざまショックに見舞われるようである。

筆者のハノイ赴任に伴い初めて海外の地を踏んだ当時八歳の娘と五歳の息子にとつても、当初は新発見とカルチャーショックの連続であった。初めて乗る飛行機、路上のバイクの洪水、見たこともない果物、そして毎日の移動はゼいたくにもタクシードー異常興奮状態で最初の数日を過ごしていた。しかしやがて、排気ガスや騒音、慣れない食事、暑さと湿気、言葉の通じないもどかしさなど、徐々にハノイ暮らしも辛く感じ始めるようになる。ちょうどその頃、「首なし」たちが彼らを恐怖に陥れていたのであった。

赴任時に最低限必要な衣類しか持って行かなかつたわが家は、赴任当初は一家でよく生活衣類を買いに出かけていたのだが、

やがて子供たちが新しい服はいらなと言い始めた。不審に思いその理由を聞いてみたところ、娘がポツリと、「『首なし』がいるから洋服屋に行きたくない」と言う。「首なし」、つまり首のないマネキンが怖かったのである。

ベトナムのマネキンは首なしタイプが多い。首なしマネキンは日本の洋服屋にももちろんあるのだが、何しろベトナムの洋服屋ではその数が圧倒的に多い。言われて気がついたが、不気味といえれば不気味ではある。どの店でも、さまざま衣装を纏った「首なし」たちがずらりと数十体並んで子供たちを威嚇していたのである。

気になった筆者は街のマネキン屋で首なしマネキンが多い理由を聞いてみた。店主のオバサンは質問の意味がよく理解できないといった表情で、「だって洋服屋だろう。頭のマネキンを見なければ帽子屋にあるよ」と答えてくれた。つまり、効率的なディスプレイのため、ということなのだろう。さらに、ベトナムのマネキンはほとんど国産なので（ホーチミンの工場で作られている）、ベトナム人の体型にあったマネキンなんだと自慢げに教えてくれた。

やがて「首なし」にも慣れた子供たちは、今度は街の面白マネキンを探し始めた。頭

が切れているもの（額から上の部分がない）、両腕がないもの、上半身がないものなど、よく観察すると五体満足（？）なのは少数派である。さらに、携帯電話屋では携帯電話を握った手だけ、そして靴屋では靴を履いた足だけ（足首から下）という、ちよつと猟奇的なマネキンも発見した。そんな手足が例によって数十個も店先に並ぶ光景を、子供たちは「きもーい」などといって面白がっていた。

結局、子供たちは、大量のカエルの轢死体に注意して道を歩かねばならないことを除けば、ハノイの暮らしを好きになつてくれたようである。日本のテレビ番組も見られない刺激の少ない暮らしの中でも、大雨が降ってきたといつては大はしゃぎし、ベトナムのアメンボは巨大だといったどうでもいいような発見をしては興奮していた。

そして三年弱のハノイ暮らしの後帰国した子供たちは、お決まりの日本に対する逆カルチャーショックの時期を経て、今ではすっかりモノや情報に溢れた生活を楽しんでいる。しかし、今でも日本の暮らしは「停電がないからつまらない」のだそうである。

（さかた しょうぞう／アジア経済研

究所国際交流・研修室）